

[課題演習概要]

技術習得と動きの理解を促す体育の学習の実践 —タブレット活用を通して—

保 坂 奏 志

Soshi HOSAKA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
中等教科教育高度実践力プログラム

(2023 年 1 月 10 日受理)

キーワード：体育，授業づくり，タブレット，ICT，遅延再生機能

1 研究の目的

平成 29 年に学習指導要領が改訂され、令和 2 年度から小学校、令和 3 年度から中学校で全面実施、令和 4 年度から高等学校においても年次実施されている。平成 20 年改訂の学習指導要領では、目標及び内容が「技能（体づくり運動は運動）」「態度」「知識，思考・判断」で設定されていたが、平成 29 年改訂の学習指導要領では、「知識及び技能（体づくり運動は知識及び運動）」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力・人間性等」で整理されているのに加え、知識を基盤とした学習がこれまで以上に重要視されるようになったといえる。

このことから、体育の学習が生徒にとって運動技術を習得及び向上することだけでなく、自分自身の動きを理解する運動実践である必要があると考える。このような体育の学習にするために、自分自身の動きを客観視することのできるタブレットの活用が考えられている。

そこで本研究では、中学校の球技領域ゴール型バスケットボールにおいて自分の動きを客観的にみることのできるタブレット機能を活用した技術の習得及び自分自身の動きの理解を促す体育の学習を検討及び実践し、再検討することを目的とした。また、体育の学習におけるタブレットの活用の方法についても検討することを目的とした。

2 研究の計画

授業の実践対象者は、F 県にある T 中学校第 2 学年の 23 名の生徒である。時期は 2022 年 11 月～12 月にかけて男女共修で授業実践を行った。授業は全 12 時間で構成され、連続する 4 時間の授業にかけてバスケットボール技術「セットシュート」の技術習得及び理解に焦点を当て行った。授業実践での生徒の変容を見取るために、第 1 時間目前に、技術に対する自信や理解度等を確認するアンケート調査を実施し、第 4 時間目後にも同様のアンケート項目に技術の高まりがみられた要因に関する項目を付け加えた調査を行った。本実践の単元構成としては、第 1 時間目にバスケットボールに関する技術及びルール等の振り返りを行うオリエンテーションをし、第 2 時間目から第 4 時間目にかけてセットシュートの技術習得及び理解を促す授業実践を行った。また、本実践におけるタブレットは、技術のポイントの説明のための動画の配信、ブラウザ上の遅延再生 Web カメラ（タイムシフトカメラ）による自分の動きの確認のための活用とした。

3 研究の内容

まず、授業前にアンケート調査を行った。アンケート項目は、「技術の得意不得意」「技術を他者に教えることができるか」等の基本項目に加え、「技術を向上させるためにすべきことは何か」について「とてもあてはまる」から「全くあてはまらない」の 4 段階評価とした。次に、各時間の授業展開は、第 1 時間目は前半にバスケットボールに関

する振り返りとして、プロジェクターを使い全体でルールや技術の確認を行った。その後、ボールを使ってドリブルを行ったり、ピボットの攻防を二人組で行ったりした。その際、ドリブルでボールをつく姿勢や目線、ピボットを行うことのできるルールの確認もしながら、実践に繋がられるよう声掛けを行った。第2時間目はセットシュートの内容に入り、前半に上半身の使い方の学習を行い、その後、上半身の使い方を意識させながら下半身の使い方及び基本姿勢の確認を行う時間とした。後半は、自分自身の動きを確認しながらの練習する時間とした。その際、タブレットを各リングに対して2か所、セットシュートをうつ生徒の横と後ろに設置し、遅延再生機能を使いセットシュート後に確認できるようにした。3時間目は、前半セットシュートで意識するポイントを全体で確認し、練習を行い、その後学習プリントを用いて、ポイントの確認及び技術習得に対する自己評価をし、再度練習を行った。本時では遅延装置を終始設置し、いつでも自分の動きを確認ができるようにした。第4時間目は、前半に様々な角度からのセットシュート練習を行い、その後レイアップシュートの練習、攻撃側に数的有利をつけたミニゲームを行い、授業実践を終えた。その後アンケート調査を行った。授業後のアンケート項目は、授業前アンケート項目に加えて、「技術の向上が授業展開のどの場面によるものか」授業場面を取り上げ、4段階評価とし、自由記述の回答欄も設けた。

4 成果と課題

本実践では、中学校第2学年を対象にバスケットボールの学習において、技術習得及び動きの理解を促す体育の学習を検討及び実践し、再度検討することを目的とした。授業実践前後のアンケート調査をもとに分析を行った。本研究の成果については、以下のとおりである。項目「技術を得意とする」に関して肯定的に回答した生徒が授業前は7名(30.43%)で、授業後は15名(65.22%)、「技術を他者に教えることができる」に関して、肯定的に回答した生徒が7名(30.43%)、授業後は14名(60.87%)、授業後の「技術の向上がみられたと思う」に関して、肯定的に回答した生徒が21名(91.30%)で、授業を通して技術の向上及び理解度の高まりがみられたことである。また、技術の向上がみられた要因に関しての項目で、「意識するポイントを動画で確認し、理解したから」に関

して、肯定的に回答した生徒が19名(82.61%)で最も多く、動画を用いてポイントを理解させる手立ての有効性がみられたことである。加えて、肯定的な回答が多くみられた項目、「友達や先生に教えてもらったから」の回答者16名(69.57%)で、生徒同士や教師との関わりによる技術の向上がみられ、学習づくりにおける他者と関わる場を設定する手立ての有効性がみられたことである。さらに、授業の振り返りの自由記述において、回答者3名(13.04%)と少数の意見ではあったが、「シュートをうった後に自分のシュート姿を見ることができ、自分のイメージと実際の動きの違いを知り、少しは修正することができてよかった。」という回答がみられ、タブレットの遅延再生機能を活用できていた生徒もみられたことである。一方で、課題については以下のとおりである。否定的な回答が多くみられた項目「自分の動きを遅延装置で確認しながら練習を行ったから」で、否定的に回答した生徒が13名(56.52%)と最も多く、理由は「使い方がわからなかったから」が8名(61.53%)で「あまり授業で使ったことがなかったことと、慣れてなかったことで効率が悪かったから」が4名(30.77%)であった。このことから、タブレット内の遅延再生機能を備えたアプリを活用したが、生徒にとっては動画撮影、動画確認、再度練習するといった単純なカメラ機能の活用の仕方の方が理解し易かったことがうかがえる。

今回の研究では、技術の向上及び理解を図るために、タブレット内の遅延再生機能を使ったが、タブレットの設置にかかる時間の確保や練習場所の限定等の効率の悪さがみられた。また、今回の実践ではネット環境が体育館においても整っておりスムーズに接続等行えたが、学校によっては異なる。そのため、今後の研究の課題としては、効率も考慮した技術の向上及び自分の動きを理解することのできる体育の学習づくりをさらに検討していくことである。また、自分の動きを客観的に確認することのできるタブレットの活用方法を、ネット環境も考慮しながら検討していくことである。

主な引用・参考文献

- 文部科学省(2017) 中学校学習指導要領(平成29年告示) 解説保健体育編. 東山書房: 京都.
- 文部科学省(2020) 教育の情報化に関する手引-追補版 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00117.html (参照日 2022/12/10) .